

第十課 意識による旅行

（宇宙の意識、四次元）

第九課では、宇宙空間のあらゆる場所へ意識による旅をして存在するものを知る方法について説明すると述べました。しかし、一般に知られている如何なる神秘主義的な方法も、心霊的なサークルで行なわれている様な指導霊に従う方法も用いられません。死者・生存者を問わず、自分の目的の為にあなたを奴隷にする権利を持つ人は、誰一人存在しません。唯一その権利を持っているのはあなたです。事実を認識し、あなたと共に活動する権利を持つのは、創作主、すなわち神のイメージを持ち、神に酷似した存在であるあなたの半身なのです。

聖書には「私の前に偽りの神を持つな」と書かれています。何故なら神に酷似し、そのイメージを持つものとは、宇宙の意識と同一の純粹な意識そのものです。宇宙の意識こそが身体を作りセンス・マインドを作りました。従って、センス・マインドが創造された目的を達成し、両親と同様に永遠の生命を得るには、両親を探し出す努力が必要です。これこそ、唯一、人間が永遠の状態である住まいに戻り一体化出来る方法です。その時こそ、万物との一体感を感じ、今日の様な分離感を抱く事もなくなるでしょう。永遠なるものと自分との間に感じている距離感は消滅するのです。

既に前課で学んだ様に、宇宙では絶え間なく化学的な変化が続き、一つの段階にある本体は次の段階の本体に吸収されます。従って、永遠に個々の本体を保つには絶え間なく起る変化に従わなくてはなりません。何故なら、個人のエゴは宇宙の計画の中で存在する場がないものの、個々の本体は存在する場があり、個々のものが宇宙を構成しているからです。そして個人のエゴがその個々の本体に吸収される事認めるのであれば、これは時には己を捨てて永遠の生命を得る事を表わす際に引用されますが、ちょうど大洋の海水に吸収される一滴の水の雫と同じ状態になります。水の雫は確かに海水になります。個々の本体はその分子構造において保たれています。

（肉体）  
（個人の肉体）

（己）

ここで再びジグソーパズルを例に挙げます。一ピースを一個人に見立てると、他のピースの間に置かれて遂に絵が完成されます。その結果全体からの分離という個人的なフィーリングは消え、絵の一部分でありながら絵全体の感覚を得ます。今生においてもあなたは個として様々な体験からなる一構成部分・ユニットです。個としてのあなたは以前のあなたを吸収し化学的变化を繰り返してきました。従って、あなたの宇宙的な本体は、全く分割される事なく継続して来たのです。あなたの生命は各段階において連続し、誕生から今日に至る迄、以前の段階を包含したものです。一肉体に受胎された日から今日に至る迄、存在に関する脈動は全て宇宙の記録に残されています。どんな脈動も行為も除外される事は一切ありません。あなたの身体は今生では二十歳ないし九十歳の間の記録があるとしても、永遠の中ではわずか一秒の一〇〇〇分の一にも満たないのです。しかし、今生において、あなたはその中の何秒かをカウントし毎秒ごとに新しいフォームを生みだしています。一個体として毎秒ごとに吸収・再生を繰り返してあなたは生命の今の段階に導かれて来たのです。

しかし、センス・マインドはこの様な判断をしません。けれども、マインドが意識と融和（一体化）すると、生命を得て以来何年もの間に起った変化の全てを顧みる事が出来ます。それにも関わらず、一瞬たりともその個体は本体を失う事はありません。しかし、センス・マインド即ち個性は自分が何であるか気づかず何度も自己を見失っています。

個性というものは僅かな時間で変化します。例えば、異なる年令の時に撮った写真が現在の自分とは全く別人に見える事からも分かります。一方、本体の意識は変わらず存在しています。結果であるマインド、即ち個性は常に最も抵抗の少ない習慣に従おうとし、社会的環境の中に自分を押し込めようとします。これが社会という同じ型の中に組み込まれていても他人に対し違和感を持つ理由です。これこそエゴ、即ちセンス・マインドが宇宙の原理と自分に対して無知である証拠です。個人の本体とエゴを分離させるとこの様な状態が生じます。自分分の何に責任を感じない。本体（意識）は、センス・マインドにとって可視・不可視どちらであっても、全てを同時に認めますが、センス・マインドは目に見えるものだけを認めます。しかし、マインドが見たものに疑問を感じる時、目に見える現象の内奥に何が存在するかもしれないと気づきます。ところが、マインドはそれをはっきり認めようとしません。隣人や世間の目を恐れるからです。これは、個人の本体はマインドに覚醒を促しているにも関わらず、マインドは世間の常識から外れる事を恐れるという事実を表しています。

(単位)

(運歩)

善い事、四次元  
(三次元)  
(意識)

宇宙の意識・四次元

宇宙の意識・四次元

(三次元)

(四次元)

(ない)

世の中には本当の意味での個人主義者はほとんどいません。稀にいても世間と馴染まず、一般社会に不適応な人と見なされて大変苦勞します。歴史的に見ても偉大な人物は皆一般社会の規範に従わない異端者でした。彼らは本当の意味の個人主義者で、先天的に生命の深い意味を理解する能力を与えられていたのです。

宇宙の意識・四次元

宇宙の意識・四次元

講座を進める前に、いわゆる物質界とは靈的、即ち生命の不可視の部分から生じた結果である事を思い出して下さい。ちようどあるアイデアを言葉にし、形として現わすまでは目に見えないのと同じです。全てのもが支えとなる不可視な存在があつてこそ存在するのです。最近科学者達は不可視の宇宙空間からある程度の物質を引き出す方法についての知識を得ました。今日では数年前に知られていたよりも更に多くの元素が存在しています。又、高価な貴金属が数種存在しますが、大量生産するにはコストが高く生産出来ません。しかし、この物質も不可視の宇宙空間から取り出されたのです。これは不可視の状態から可視の状態が生じ、再び不可視の状態に還る事を証明するものの一つです。そして、このプロセスは何度も繰返されます。これは次のステップにおいて神秘的な手段を用いずに宇宙を観察し旅する為の支えとなるでしょう。しかし、これは生命からなる意識の海の中にセンス・マインドを拡張する事で可能になるのです。

では、マインドを拡張するとは何を意味するのでしょうか。それには真の知識を得たいという要求がその基盤とならなくてはなりません。ここで機械装置を一つ例に挙げましょう。

天文学の初期に、小型光学機械が宇宙空間に輝く星を観察する為に作られました。これは、ちようど一つの輝く光として見えるものを更に観察・研究する為に、機械装置を用いて行なう一種の視覚の拡張でした。そして、人間はその光が固体か否か・固体であれば表面に何が存在するのか知ろうとしました。月は地球に最も近く大きな物体である為、最初に観察の対象となり、山脈やクレーターが月面上に発見されました。肉眼で山脈やクレーターを見る事は不可能であり、従つて天体望遠鏡は知識の拡張を助ける為、機械で作られた目と言えましょう。これらは全て知識を得たいという要求があり現実化したのです。つまり、人間のマインドの内奥にある何か、地球以外にも生きる場所は沢山あると伝えていたのです。

時の経過に伴い光学機械を用いて視野を拡張する技術は進歩し続けました。今日ではパロマー山上の200インチ天体

内奥にある

(1964年当時)

心 三波元

三波元 心 三波元 (四)

三波元 (三)

望遠鏡が、かつては未知であった不可視の宇宙空間に存在する天体に関する知識を伝えてくれます。しかし、これも序の口に過ぎません。更に電波天体望遠鏡が多くのものを明らかにするでしょう。顕微鏡に関しても同様です。

人間の感覚器官が自分だけに関心を持ち、意識を用いなければ、果してこうした技術的進歩をなし得たでしょうか。しかし、この意識・人間の不可視の部分は、フォームを持つ生命である因の中へと更に深く探求する様に人間を駆り立てます。実際の人間、即ち感覚器官に依存している人間は、その半身である因から離れてしまいました。故に、宇宙の中では点一つ程の微小な存在であっても不可欠な存在であると知る為に、不可視なもの奥に焦点を定める装置が必要になったのです。そして、宇宙に存在する物事を知る事は人間の義務です。こうした装置を用いて宇宙空間を探索する様にマインドは意識に駆り立てられるので、この文明において、今まで決して知る事のなかった宇宙空間に関する知識を次々に発見しているのです。この事から、人間のマインドが意識の指令を受け入れるならば、意識は決して過った指令を出さない事が分かります。その際、印象はマインドに都合良く変更される事なく感受されます。これこそ、唯一、意識がマインドに与える印象は正しいものであるとマインドに証明出来る方法です。

しかし、宇宙の全てを人間に解明してくれる機械が作られる事はないでしょう。人間のマインドと対をなす意識を用いる事こそ、唯一、人間が全宇宙について学ぶ方法です。従って、今まで使用された機械装置類は意識の指令に対する信頼・信念・確信をマインドに抱かせる事になるでしょう。かつては存在しないとされたものが実在すると判明した過去の観測や体験を通して我々は学ぶべきです。それは、意識により印象としてもたらされるものは皆、どこかに存在しているからです。従って、マインドは今までの様に自分勝手な判断ではなく、意識による指令を受けるべきです。宇宙の意識によって与えられるものを現実のものとして受け入れなければなりません。即ち、この事はセンス・マインドが半身(意識)を発見し、全宇宙の一部となる唯一の方法です。

イエスは―見なくても信じるものは幸いだ―と述べています。視覚では宇宙の遙か遠方を見る事は出来ませんが、意識の目を見る事が出来ます。そこで機械装置を使って行なった事をセンス・マインドに行なわせる事にします。それまで不可視であったものを機械装置によって見る事をマインドが受け入れた場合と同じ様に、今度は機械の代わりに意識を用いる事をマインドに認めさせるのです。そして、望遠鏡で見たものを信じた様に意識によって見たものを信じるのです。

一度に多くを見ようとしてはいけません。望遠鏡を使用する時と同じ様に、あなたのマインドを意識の中に少しづつ拡張（浸透）しなさい。無理に行なってはいけません。自然のままに行なって下さい。我々は生命の満ちた永久不滅の海へ入るのであれば時間は充分にあります。ゆっくり進歩する方が早く進歩しようとして過ちを犯して混乱するよりも良いのです。忍耐をあなたの基盤としてマインドを意識の中に徐々に拡張（浸透）させましょう。意識は印象をマインドに伝えますが、初めは違和感を持つ事を忘れてはいけません。新しい物事は全てそうです。マインドを幼い子供の様に素直にさせて印象を耳を傾け、映像を観察させる様にすると良いのです。この時マインドが疑問を起こし、与えられた印象から都合の良いものを作り出さない様にしなければなりません。

一度に感受される印象は常に全体像からするとほんの一部分にすぎない事を忘れてはいけません。ジグソーパズルの様に、ピースの全てを見る事も、どこにピースが当てはまるかも知る事は出来ません。絵を完成するにはピースが順々に置かれる必要があります。その絵の余白を世間で蓄積した勝手な考えで埋めてはなりません。それは個人的な好みによるものです。受けた印象を少しでも疑ってはいけません。それは神を疑う事と同じです。以上の様にすると、何れがこの世の中に蓄積された知識か又は宇宙的な印象か見分けられます。

世俗的（習慣的）な印象を感受する場合もありますので惑わされてはいけません。マインドが馴染んでいるこれらの印象の多くは、それが宇宙的性質を帯びたものであり所定の場所に置かれるなら、絵の一部として適合する場合があります。しかし、受けた瞬間には恐らく適合しないでしょう。これらのアイディアは世俗的（習慣的）な体験がある為に、置かれるべき場所に落ち着く前にむりやり適当な場所に入り込もうとする場合があります。ちょうど画家が黄色を使うべき時に赤の印象が続いてやって来た為に、赤の濃淡をつける印象の方を選択する様なものです。

印象がそっと囁く声のように伝えられる場合には、誰かがあなたに話しかけている様に感じますが、これはあなたの意識があなたのマインドが慣れている言葉という形を用いて表しているのです。又、印象を言葉では表現出来ない時もあります。映像の形で印象が伝えられて、特にそれがカラーの場合、前頭部の中にあるマインドのスクリーン上に意識によって焦点が定められます。少なくとも私の経験ではそうです。おそらくこれらの事が理解されていない為に第三の目、又は千里眼などと言われているのです。仏像の前頭部に宝石が埋め込まれていますが、これは視覚の拡張を意味し実際の

正確な理解（むりやり）  
インプット

両眼と三角形を成します。イエスはこれを―視覚を統一し、マインドを統一せよ―と言っています。ここで、イエスはマインドの再生について述べているのです。我々はこの講座でマインドと意識を融合し一体化させて一構成部分となる努力をしています。イエスはまさにその事を言おうとしたのでした。これによって意識とマインドの分離は消滅します。何故なら、人間は完全な人間となるからです。

マインドが促進する傾向にある、願望に基づいた考えを出来る限り避けなければなりません。つまり、マインドは好みに従い空想を描く傾向があるのです。印象には二つの状態が存在するという心象を空想は促進させます。マインドは空想する傾向が強く、二つの顔を持つ人間など風変わりなものを創る時もあります。顔の一つは後ろに、もう一つは前にありますが、自然はこの様な頭部を創る事はありません。私が空想について述べるのは、印象や映像は意識を通じて伝えられますが、空想と大変密接に関わっている為です。

マインドは空想力に長けている為に、意識からその活動をコピーします。コピーする事により偽物が生み出されるには、先ず本物が存在しなくてはなりません。空想の際にこうした事が起こるので、充分注意する必要があります。本物の印象とコピーの印象の違いを区別出来る人は殆んどいません。発明家や芸術家はこの方法を駆使し思いがけない新しい発明をします。この様に本物の印象とは常に可能性を帯びているのです。

スペース・ピープルが地球人と異なる進歩の道を進んで来たとしても、人間が宇宙を旅する可能性を示してくれました。従って我々もいずれ意識から伝えられる印象に従う事によって宇宙旅行が出来る様になります。故に人間が到達しなければならぬゴールとは、意識にマインドを融合（一体化）させる事なのです。

この観点のもとに推理すると、印象の片方は風変わりな創作を導き出し破壊的であり、他方は惜しみなく建設的です。そこで、建設的な論理の方を、真実の評価を得る為に用いなくてはなりません。そして、何事も真実を知ろうとするのであれば、個人的な意見に囚（とら）われてはいけません。これは、日常生活において他人と共に生活する場合に大変賢明な方法です。

甚

（とら）

必高橋氏消した

それでは、第一段階へ進む事にしましょう。先ず、あなたはマインドをリラックスさせなくてはなりません。これは、唯一、マインドが本来の目的の為に自分への関心を失った時に行なう事が出来ます。ある少年が野球に夢中になっているとします。もし野球の他に学びたいものがあれば、野球に対する興味を完全にマインドから消さなくてはなりません。そして学ぼうとするものに十分な注意を払う必要があります。

眼を開けたままでこれを行なうのは難しい場合もあります。見えるものに注意力が妨げられるからです。従って伝えられる印象や映像に充分注意を集中する為に目を閉じて行なうと良いでしょう。初めは五分ないし十分以上は行なうべきではありません。又、初めから結果を期待し過ぎないで下さい。

知識を得ようとする時にマインドを失望させてはいけません。手に注意を集中してじつと見つめる方法も効果的な練習だと思えます。こうする事で、手が如何にあなたの役に立つか、生活においてどんな価値を持つか分かります。手から充分に重要な印象を受けた後、眼を閉じてどんな印象がやって来るか待つのです。これをマインドが推測する事なく正しく行なうならば、あなたの手は活発に活動する無数の細胞から構成され、絶えず活動している様子が分かります。爪や関節などを構成するタイプの分子からも知識を感受します。

そして如何なる機械装置を用いて見るよりも精密に、手の構造やエネルギーの動きを見る事が出来るでしょう。身体が如何に機能するかを知りたい時、この方法は人体の如何なる部分にも応用出来ます。

こうした研究から今まで経験した事のない程、進歩に対してあなたは自信を持つ事になり、正しい方法で学んでいる事が分かるでしょう。あなたは視覚で見る事が出来ないものを見、言葉にされない言葉を聞く事が出来るからです。そして、マインドからは独立していながら、全てのものと同様に、生命からなる意識の海に気づく状態へマインドを拡張出来ます。

この段階から、我々は望遠鏡を用いる場合と同様に、生命からなる意識の海に気づく状態へマインドを拡張出来ます。更に、万物を培養する孵卵器である宇宙空間へとマインドを拡張する事も出来ます。そして、不可視の宇宙空間に興味を持って持つほど、眼では見る事の出来ない印象を、意識はより多くマインドに伝えます。何も存在しないと考えられた宇宙空間には、マインドが想像出来るよりも遙かに多くの活動が起こっているのです。かつて全く経験した事のない様な印象や映像を受ける場合もあります。手を用いた実験で印象を受ける事が出来る様に、

宇宙空間における活動やこれから起ころうとする出来事の印象を受受出来ます。

あなたの感受する印象がどの様なものかをここで詳しく述べる事は出来ません。自分の印象を受ける代わりに私の話した事に影響される場合があるからです。しかし、この方法で練習された後、私宛に結果を伝えて頂くとあなたが研究を正しく進めているかどうか判断出来ます。

あなたは練習する為に、外に出て行く事も空を見上げる事も必要ありません。室内で行なう事が出来るのです。何度か試して上手く行かないからといって失望しない事です。良い結果を得るには、取り除かなくてはならない世俗的（習慣的）な障害が沢山あります。この講座であなた方が学んだ意識とマインドに関する知識を持たずに学んだ為、私も習得するのに何年も掛かりました。

常に記憶すべき事はひとつ、意識とは、全てを包括するパワーであり英知であるという事です。意識は万物の孵卵器であり創造主です。そして、マインドとは意識の指令を遂行する為に創造されました。（※訳注1）

意識は全てを知る存在ですが、マインドは知りません。故に、マインドは意識の生徒であるべきです。マインドが過ちを避けたいならば、意識による指令に従う事を学ばなくてはなりません。（※訳注2）

以上で、我々は、次の講座で宇宙空間の探査に進む為の確かな基盤を作りました。そこで、如何に宇宙旅行の準備が整い、共に真実と直面出来るか調べる事にしましょう。

(31)  
（※訳注1・マインドは意識の指令を遂行する為に創造されている）

（※訳注2・意識とは宇宙の英知の無限の表現である）